

魅力アツプ事業で目指す ずっと住み続けたい交流拠点へ

屈指の利便性を持つ交通アクセス

千葉県北西部の北総台地に位置する鎌ヶ谷市は、面積約21km²のコンパクトなまちだが、市民が日常的に利用可能な鉄道駅が何と8つある(新鎌ヶ谷駅、鎌ヶ谷駅、初富駅、北初富駅、鎌ヶ谷大仏駅、くぬぎ山駅、六実駅、馬込沢駅)。

また平成3年に開業したばかりの鎌ヶ谷市の新たな表玄関・新鎌ヶ谷駅では、4つの鉄道路線(東武野田線・新京成電鉄・北総電鉄・



利便性の地図

成田スカイアクセス)が交差しており、成田空港まで最短38分、羽田空港まで同64分、東京・日本橋まで同30分で結ばれている。
東武野田線や新京成線などの踏切が多く、現在はそれが中心部の道路渋滞の要因ともなっているのは否めないが、鉄道路線の連続立体交差事業が市内中心部で着々と進められており、近い将来の渋滞解消が期待される。
このように交通アクセスの利便性を背景に、鎌ヶ谷市の首都圏の住宅地としての評価は高まるばかりだ。現在の人口は約11万人であるが、平成22年に実施された直近の国勢調査では5

年間に約5000人も増えた。人口増加率は千葉県内でも屈指で、鎌ヶ谷市が市制施行した昭和46年当時に比べれば、人口は40年間でほぼ倍増した計算になる。
土地区画整理事業が概ね完了している新鎌ヶ谷駅周



しみずきよし
清水聖士
鎌ヶ谷市長

辺では現在も、住宅や高層ビルの建設が相次ぐなど、さらなる人口増に期待が膨らむ。

清水聖士・鎌ヶ谷市長は語る。「まずはこのまちに住みたいと、思っていただけのようなまちであることが重要です。そして、一度住んでみたらずっと住み続けたいと、思っていただけのような魅力あるまちであり続けたい。そう考えています」

そうした観点から鎌ヶ谷市では近年、次章で述べるように、新たな魅力の掘り起しと発信を行う「鎌ヶ谷市シティプロモーション」事業を積極的に実施している。

その契機となったのは平成22年7月の成田スカイアクセスの開通だった。都心と成田空港を結ぶ成田スカイアクセスが開通したことにより、成田から最短38分の中間点・新鎌ヶ谷駅は、出国時には周辺地区から成田を目指

す拠点駅の一つになり、帰国時には周辺地区へ帰るための拠点駅の一つとなった。新鎌ヶ谷駅での乗り換えの際に、利用者の人々が思わず途中下車したくなるような魅力が駅周辺に新たに備われば、鎌ヶ谷市の広域交流拠点としての位置付けはより明確になり、さらなる活性化の要因ともなり得る。

魅力あるまちづくりを

また、鎌ヶ谷市では平成23年度から平成32年度までの10年間のまちづくりの基本的な方向性を示す「総合基本計画後期基本計画(かまがやレインボープラン21)」を、平成22年度中に策定した。策定に当たっては市長が市民とともに語り合う地域懇談会を全エリアで開催したほか、市内各種団体代表者などで構成す

る「まちづくり市民会議」の実施、また広くパブリックコメントで意見を収集するなど、市民の声を生かす努力を考え得る限り行った。
鎌ヶ谷市シティプロモーションは、この市民とともに策定した後期基本計画の重点政策である「地域活性化」「魅力あるまちづくり」の核を成す事業であると同時に、ずっと住み続けたいと市民に思ってもらうための「魅力づくりの実行計画」ともいえる。

鎌ヶ谷市シティプロモーションの準備は、後に述べる「鎌ヶ谷市シティプロモーション検討会議」の発足によって始まっ



今年の秋の市民まつり(10月)には相馬市から「野馬追い」も特別参加



北極と南極を結ぶ東経140度線にあるまち・鎌ヶ谷の看板



鎌ヶ谷市は梨の名産地(梨ワインも人気)

梨の花



市内外からの多数の参加者が燃える「YOSAKOI かまがや」

行財政改革を経て 積極的なまちづくりを本格化

25年度中に小中学校施設の耐震化率が100%達成となること、同年に震災の際に想定されている全避難所の備蓄倉庫整備が完了することなど、鎌ヶ谷市の充実した防災への備えと併せ、新たな魅力の一つとしてアピールしている。

以上述べてきたように、利便性の高い交通



「かまがやスカイビュー富士山フォトコンテスト」最優秀作品(鎌ヶ谷市役所屋上からの眺望)

たが、成田スカイアクセス開通および後期基本計画策定の前年に当たる平成21年に発足した、庁内公募による地域活性化推進チーム(プロジェクトチーム)の活動は、その前段に当たる事業といえるだろう。

地域活性化推進チームはもともと、平成20年度策定の「成長の戦略プラン」で示された地域活性化のためのさまざまなプランを実現し、新たな事業を発掘するための実行チームとして発足した。その成果はこれまで、「金

環日食プロジェクト事業(平成24年5月、市と市内企業がコラボしての観測会)」「東経140度線の案内看板の設置(鎌ヶ谷市は北極点と南極点を結ぶ東経140度線上のまちであることの周知事業)」「かまがやスカイビュー富士山フォトコンテスト(鎌ヶ谷市役所屋上からの富士山の景色をPRするための事業)」「プロ野球・日本ハムへの新入団選手の手形掲示(鎌ヶ谷市には日ハムの2軍の拠点・ファイターズタウンがある)」など、鎌ヶ谷市の個性をアピールする多彩でユニークな事業となつて結実してきた。

こうした地域活性化推進チームの活動は行政が直接発信する魅力アップ事業の数々であるが、これと並行して実施されている鎌ヶ谷市シティプロモーションは、市内の民間活力(企業・団体など)とのコラボによって、鎌ヶ谷市への国内外からの「人の流入・交流」の促進を図り、それをまちの魅力向上、にぎわい創出、産業の活性化につなげ、市民の市への愛着向上と人口増加に結び付けようとする取り組みだ。

「鎌ヶ谷市シティプロモーションは、行政だけでは実現が難しかった取り組みです。そのためまず市内の事業者や団体の皆さんにお声掛けをさせていただいて『鎌ヶ谷市シティプロモーション検討会議』を設置し、さまざまな事業を実現してまいりました」(企画財政課長)

検討会議によって検討され、これまでに実アクセスなどの地域資源を背景に、鎌ヶ谷市では活発な魅力発信事業が行われているわけだが、こうしたまちづくり事業への積極的な姿勢を打ち出せるようになったのは、主に清水市長が3期目の当選を果たした平成22年度以降のことだという。

「それ以前の2期8年は、財政再建が最優先でした。その間は市民の生活環境維持・向上のために必要な事業は実施しつつも、他市に先駆けて組織のスリム化と人件費の削減を行うなど、全庁挙げての行財政改革に邁進しました。平成14年に6部33課だった組織を平成25年現在では4部27課に統合し、職員数も789人から684人に削減、人件費は75・7億円から63・4億円に削減しました。中でも企画課と財政課の2課を統合し、長期計画と毎年の予算編成を一人の課長が掌握する体制としました」(清水市長)

特に「平成15年頃の国の三位一体改革の影響による財政悪化は、非常に厳しかった」と改めて述べ懐する。しかし、そこで大きな力になったのが市民の理解だったという。「市の財政状況がどのようなものであるかについて、情報を共有するべく、自らが市民の皆さんの方に向いてタウンミーティングを行いました。当然、市民の皆さんからは厳しいお叱りの



2軍選手の合宿所、球場、雨天練習所で構成されるファイターズタウン鎌ヶ谷



北海道日本ハムファイターズ新入団選手の手形

声があるものと覚悟しておりましたが、幸いなことに『自分たちも協力できるところは協力するから、まちの将来のために頑張っている』という声を多くいただくことができたのです」(清水市長)

タウンミーティングは次年度の予算編成期間である平成19年11月から実施し、平成20年2月までに申し込みがあったすべての自治会12カ所で行われ、延べ439人の市民が出席した。そこでの活発な意見の交換を通じて、清水市長は鎌ヶ谷市民の間に醸成されている

施された事業は、「しんかま屋台村」設置(平成25年8月〜週4日営業)、「ゆれにくいまち鎌ヶ谷」発信事業(平成24年度〜)、「イルミネーション」事業(平成24年度〜)、新鎌ヶ谷駅周辺で実施)などだ。

しんかま屋台村は、新鎌ヶ谷駅横の空閑地(鉄道事業者が所有する工事用地)を活用し、週に4日間出店する、飲食店や化粧品店などの屋台(車両に設置された移動店舗)が多くファンを集めている。また「ゆれにくいまち鎌ヶ谷」の発信事業は、千葉県が発表した「ゆれやすさマップ」において、地盤がしっかりとされた北総台地が他地区に比較して揺れにくいとされたことを受けて発案されたもの。平成



市民との活発な意見交換が行われる「タウンミーティング」

戸幕府が現在の千葉県北西部一帯(松戸市・柏市・鎌ヶ谷市・白井市にまたがる地域)に設けていた放牧場の一部跡地で、牧場は明治2年に廃止されるまで250年以上も存続していたとされる。鎌ヶ谷市とその周辺の地域は、室町時代以前からの史跡が豊富な土地柄だが、近代的な市街地としての面的な開発は、この広大な牧場跡への入植者によって本格化した。もともと旧街道が発達していた鎌ヶ谷市地域には、歴史的に多くの交流人口が訪れていた。そこへ多くの入植者が集まり、近代的な都市への礎が築かれていったわけだ。

それからさらに百数十年後、鉄道4路線が乗り入れるとともに道路網が発達し、定住人



ショッピングセンター内に整備の進む「きらり鎌ヶ谷市民会館」

強い参画意識を感じたという。

この時期はちょうど前述の「総合基本計画後期基本計画」の策定着手前でもあった。そこで清水市長は後期基本計画を市民協働でつくることを発案、プロセスのすべてに市民に参加してもらいながら策定した。この後期基本計画が「市民との協働で達成する計画」というもう一つの名称で呼ばれることが多いのはそのためなのだ。

こうした市民協働のうねりは、新鎌ヶ谷駅周辺地区のまちづくりにも生かされている。後期基本計画では鎌ヶ谷市を「千葉県北西部を代表する広域交流拠点都市」と位置付け、これまで述べてきたさまざまな取り組みを行ってきたわけだが、特に新鎌ヶ谷駅周辺の



幕府の軍馬放牧場だった「下総小金中野牧跡」は今も市内に点在

口を着々と増やしつつ、多くの交流人口が集まる現在の「ゆれにくいまち鎌ヶ谷」の姿は、そうした歴史的風土の延長線上にあるようにも思えてくる。

かつて北総台地の広大な牧場で育った無数の馬たちに代わって、現在、ファイターズタウン鎌ヶ谷では若手プロ野球選手がすくすく育っており、あのダルビッシュ選手もここで育った。有望な若手選手を育てるコーチの存在を「名伯楽」とよく表現するが、名伯楽はもともと素質のいい馬を見つける「目利き」を指した言葉だ。かつての牧場跡で成長する野球選手を馬に例えても、決して失礼にはならないだろう。また既に述べてきたように、鎌ヶ谷市では着々と増える新住民や、地域に定着



「ゆれにくいまち鎌ヶ谷」

南街区・北街区・中街区については、鎌ヶ谷市の新しい顔となるべき中心市街地の形成を目指し「拠点形成街区」と位置付けている。そのため、清水市長が就任した平成14年度以降、該当地区の土地利用に関する地権者向けの勉強会を協働で開始。16年度からは「新鎌ヶ谷地区まちづくり懇談会」に衣替えし、景観形成の検討を行政と地権者との協働で綿密に実施してきた。同懇談会はさらに近い将来の「まちづくり協議会」に向け、平成24年8月から準備会を積み重ねているところだ。

地権者と行政とでまちの顔を協働でつくる試みは平成9年以降、新鎌ヶ谷駅が開業する以前の中心地区だった東武野田線・鎌ヶ谷駅前の駅前広場づくりにおいても行われ、全国から多くの視察が訪れるほどの成功事例となった。しかし、新鎌ヶ谷駅周辺の拠点形成には数多くの商業施設、乗り入れている4つの鉄道路線との兼ね合いなどもあり、調整はより複雑で、進展に時間が掛かるのは致し方



1776年に造られた鎌ヶ谷大仏

ない。しかし、平成14年から始まった協働による取り組みは、数段階のプロセスを経て、今や「新鎌ヶ谷地区まちづくり協議会」発足の準備をする段階までに達している。

鎌ヶ谷市のプロジェクトチーム「地域活性化推進チーム」の活動および、行政と民間事業者・団体が推進する鎌ヶ谷市シティプロモーションと、市民協働によるまちづくり協議会の取り組みとが相まって、どのような鎌ヶ谷市の新しい顔が誕生するか。その途上にある現在、既に新鎌ヶ谷駅周辺には大きな活気が生まれているだけに、これから先がとて

子育て支援策とともに、歴史が物語る「人の育つまち鎌ヶ谷」

鎌ヶ谷市内には国指定史跡の「下総小金中野牧跡」がある。これは軍馬を育成するため、江

して代を重ねた新世代の市民が子育てしやすいまちづくりを、常に最重要施策として掲げ、財政が苦しい時期にも貫いてきた。

「後期基本計画の中でも平成27年度までに待機児童をゼロにするという目標を掲げましたが、それに向けて新鎌ヶ谷駅の高架下に民間保育所を誘致したり、「あっとほーむママ」(家庭的保育事業)を実施したり、既存保育所の定員増を図っているほか、平成26年度からは家庭的保育事業の新規開設や、新たな民間保育所の誘致にもさらに力を入れる予定です」(清水市長)

「ゆれにくいまち」「東経140度線上のまち」など、鎌ヶ谷市の特徴を表現するキャッチフレーズには事欠かないが、かつて多くの名馬が育ち、有望な野球選手が毎年巣立ち、子育てのしやすい鎌ヶ谷市には、「人が育つまち」という称号こそふさわしいように思われる。

(取材・文 遠藤 隆 / 取材日平成25年10月11日)



鎌ヶ谷市の人気ゆるキャラ「かまたん」